

パレスチナ・ガザ 支援活動3年

住民へ生きる自信を

国際支援NGO「日本国際ボランティアセンター」(JVC、東京)職員で宇都宮市出身の福田直美さん(32)が約1年ぶりにイスラエルから一時帰国した。イスラエル軍による封鎖状態が続くパレスチナ自治区ガザを中心に支援活動に取り組んで3年。目指すのは、現地の人々が自信を持って暮らせるよう後押しをすることだという。【中村藍】

3週間で約1400人 養失調児への治療用ミルクが犠牲になったイスラエルクを提供。深い心理的ダメージを負った子どもに爆。福田さんらは攻撃がはおもちゃを与えた。だやんだ09年1月下旬、軍が、空爆後もイスラエルの検問所からガザ地区に入った。崩れたがれきの下から家族の遺体を掘り出す住民。目の前で家族を殺され、しゃべることができなくなった子ども。福田さんは宇都宮市内のサラリーマン家庭に育った。大学時代にボスニア・ヘルツェゴビナ内戦中のサラエボで、言論による抵抗を続けた日刊紙「オスロボジエニエ」を

JVCは緊急支援対策として、救急セットや米

研究。卒業後は新聞社に就職したが、安全保障を

宇都宮出身 NGO職員・福田さん一時帰国

「元気になる姿に意義」

学ぶために退職、英国リーズ大学の大学院に留学した。このころ、パレスチナ自治区の紛争が繰り返し報道されていた。「なぜ誰も止められないのか」。大きな疑問が膨らんだ。帰国後、JVCに就職。07年4月から現地で活動を始めた。

封鎖が続くガザ地区では、食糧不足の人が約6

割、失業率は4割を超えている。福田さんらは子どもたちに牛乳やビスケットを配給。アラブ人とユダヤ人の交流の機会もつくったが、実現は難しい。「常に壁にぶちあたっている」と打ち明ける。それでも、この仕事を続ける。栄養失調の子どもが配給で体重が増えたと、母親が報告してくれた。明るい表情だ。「活動を通じて人々が元気になっていく姿を見たとき、この仕事の意義を感じます」だが、目指すのは「支援予定だ。ビザの関係で現地に滞在できるのはあと1、2年。「人間の尊厳を保っていきけるようなお手伝いを続けていきたい」。8日、再び日本を飛び立つ



ガザ地区の子どもの写真を手にする福田さん(宇都宮市)